



書評

国語授業の改革14 授業で子どもに必ず身につけさせたい「国語の力」

教科内容・指導事項の再構築と
言語活動を生かした楽しい授業

科学的「読み」の授業研究会 編



学文社 2484円
☎03・3715・1501

本書は、それをベースに▽説明的文章の吟味・評価についての「国語の力」▽古典・伝統的言語文化についての「国語の力」▽新聞・メディアについての「国語の力」を説明するというテーマごとの小中高の授業が展開され、さらに▽「単元を貫く言語活動」とか、▽「学びの共同体」をどう考えるかなど、国語科教育の最新の争点についての論文があり、さらに▽授業内容と研究協議会での「授業へのコメント」が収録されており、また▽「国語科の教科内容の再構築と系統性についての新提案」というテーマの論文が掲載されている。豊富な内容の研究書で大いに啓発される。

(関根 正明・元山形大学講師)

説明的文章の読解などが鍵

本書を読みつつ、評者はこの研究会が目指す「国語の力」とは、次のようなものと読み取っていた。
それは、一人一人の子どもが、自らの可能性を最大限に伸ばし、その子なりに積極的に社会参加し、自らの力を発揮していくために必要な言語力を身に付けること、そのために、漢字や文法や語句・語彙などに関わる力はもちろん、例えば説明的文章やいろいろな解説・評論などを、その構造や論理に着目しながら理解できること、さらにその学習活動を通して、社会の仕組みを見抜く力を身に付けていく……これらの獲得が「国語の力」を身に付けること……これがこの研究会の基盤になっていると受け取っていた。

インターネット・ゲーム依存症 ネットゲからスマホまで

岡田 尊司 著



文藝春秋 (文春新書) 886円
☎03・3265・1211

うつ病・学力低下招くリスク

「かつては、ゲーム産業は日本の成長産業で、国としてもその発展に期待する意識が強かった。子どもに弊害が起きていることが明白であっても、それに対する啓蒙や予防ということになると、メーカー側に遠慮して、その動きは遅々としたものであった」

著者は精神科医、京都医療少年院で少年矯正教育に従事、現在は岡田クリニック院長、山形大学客員教授。著者は既に『脳内汚染』(文藝春秋・2005年刊)で、ゲームやネットの依存に警告を發していた。その後、脳の構造や機能レベルの研究が盛んに行われ、重度のゲーム依存が脳機能の障害だけでなく、脳の萎縮さえ引き起こすことが明らかになっている。障害として、神経過敏、焦燥、多動、不機嫌、攻撃性、不安、無気力、鬱、注意力低下、集中力低下、社会的機能低下、学業成績低下などをもたらす。

アメリカ精神医学会は2013年、ネット依存障害の診断基準を定めた。中国、韓国、ベトナム、タイは、ネット使用を規制する。

児童・生徒の変質は、教科指導、生活指導を困難にする。本書を資料に使い、また愛知県刈谷市、兵庫県多可町、岡山県教委などの対策を参考に、学校はネット依存予防を訴える必要がある。子どもの健全な成長のため、教員の過重負担、疲弊を防ぐためである。文科省も「ネット断食」合宿を実施する。

(海老原 信考・元千葉県立高校校長)

おてつだいの絵本

辰巳 渚 作
すみもと ななみ 絵



活に
説き
大切
る一
頓と
とに
量
「お
ちの
う。
一太
読み
伝い

くり
くり

521

委員会教育長

人生の光と影を見据

ついで・こまごま
慶應大卒業後、東京都江戸川区
採用。生活振興部長などを経